

祇園会と渡来懸装染織品

はじめに

現在の祇園祭は、八坂神社とそれに奉仕する宮本講社が昇ぎ出す三基の神輿、鎧武者の絃召ツルメツ、久世村の駒形稚児からなる神幸祭（七月十七日）および還幸祭（七月二十四日）に加えて、氏子町より出す三十二基の山鉾巡行（七月十七日）を総称している。

山鉾の工芸美は、質、量、品種において充実し、世界の至宝といつても過言ではない。特に山鉾町に遺存する懸装染織品は、近世染織美術史を通観し得る内容をそなえ、中国大陸文化圏はいうまでもなく、印度、中近東、大航海時代以降の欧州の染織品多数を今も使い続け、山鉾風流の面白さを引き立たせている。この懸装染織品は、南北朝期に出現した山鉾風流に伴って使用されたのであるが、当時より室町時代後期にいたるものは遺存していないが、室町時代末期

より桃山江戸初期におよぶ間に使用されたものとして、保昌山の八仙人図旧見送り（現軸装）と役行者山の安楽庵裂（現面袋）があり、近年、欧米の染織美術史研究者が注目しはじめた、中国系絨毯類ならびに朝鮮綴の伝承名をもつ毛織敷物の一群が、この山鉾町にのみ遺存し、現在もその一部を祭事に使い続けていることは、極めて注目すべきことと言わねばならない。

本稿では、まず八坂神社の本源的祭神の性格と、祇園御霊会に言及しながら、山鉾の初期の姿について絵画資料をもとに考えてみたい。特に室町時代後末期から江戸前期にいたる洛中洛外図をはじめ、祇園祭礼図に描かれた祇園会の情景から懸装品の姿を推定する作業と併せて、現存する中国系絨毯および朝鮮綴との同定を試み、中世末期から近世初頭にかけての山鉾懸装品の実体を考察する。それ以後については、十七世紀末あるいは十八世紀初期より記録の始まる

吉田孝次郎

山鉾町町有文書および宝暦七年刊の祇園御霊会細記に記載されている懸装染織品を照合して、懸装品の種目別一覧表を作製し、ひとまず識者の参考に供し、詳述は別の機会をまちたい。

一 龍神

八坂神社はもともと祇園牛頭天王社あるいは祇園感神院と呼ばれた神仏習合の靈廟であった。八坂というのは、六世紀後半頃、朝鮮半島より渡来した高麗人が農耕生活を営んだ「郷」の名である。農耕の民であれば豊穰の源である水、雨をもたらす天神、龍神の信仰が彼等の心に根深く存したのは当然であろう。祇園社は、この古代における龍神信仰を源に成立したのであった。かつて高原美忠氏（八坂神社元宮司）は、「八坂神社の本殿は深い池の上に建てられており、そこには龍神が住んでおられる」と記した⁽¹⁾。また松前健氏は鎌倉時代に成立した説話集『続古事談』を引用し「祇園社の宝殿の下に龍穴があり、延久二年（一〇七〇）祇園社が焼亡。そのときに比叡山の梨本座主が龍穴の深さを調べようとしたが五十丈（約一六〇m）もあつて底が知れないので調査を中止した」と述べている⁽²⁾。現在の祭神は、素戔嗚尊、奇稻田姫と八王子となっているが、本来の祭神は「龍神」なのであった。

このことは、古くから懸装染織品に好んで採られた主題が「龍」であることと深い係りがあるだろう。（図1）祇園社の本殿は三つ



図1 中国刺繍 登り龍図見送 役行者山

の間によって構成されており、中間の祭神は牛頭天王でここを大政所といい、その神輿を古くは大政所井と称したが、今では中御座とのみ呼ぶ。西の間は、龍女波利女の御座であり、その神輿は少将井。本御前とも呼び親しんだが、これが西御座。東の間は沙羯羅龍王の娘で、神輿は今御前と呼びこれが東御座である。これを、素戔嗚、奇稻田姫、その八王子の垂迹であるとしている。

八坂神社の神紋は「左三つ巴」と「窠」の二つで、三つ巴は龍蛇、窠は瓜の断面を図様化したもので、これらは龍神とそれへの供物を意味している。この二つの神紋は、水を象徴する龍体の神に夏の実りを供えようという古代八坂郷民の心映えをよく示していると言えよう。

祇園という呼称は、印度の仏蹟、祇園精舎に依拠しており、牛頭天王はその守護神であるというのが仏教思想に基づく定説ながら、

祇園の神、牛頭天王はもともと井泉に住む蛇体の神で、八坂郷に古代より住んでいた人達によつて祭られた神のおもかげを今に留めているのである。松前健氏の説くところによれば、「朝鮮半島に古くから存する牛頭、牛首という地名は、牛の首を切つて龍神に供えるという信仰儀礼からでたもので、牛頭天王とは関係なく、今でも山の神や龍神のために、牛、豚、鶏などの首を切つてその頭を祭壇に供える風習がある。龍神が住んでいるという龍池や龍井に、雨乞いのために切り落した動物の首を投げ込むと、水が汚れる。龍神は清らかな水を好むことから、水の汚れをさらつて怒りあばれ雨を降らせる。この不浄法による雨乞いは韓国独自のもので中国にはこの方法は存在しない」という。これは示唆に富む興味深い説である。私には祇園社の牛頭天王の正体がいまだ判然としないが、それが龍体の神であり、水が原因で起つた疫病の流行を、牛頭天王のたたりとして受けとめ、それを祭り慰撫することでそのたたりを鎮めるものとすれば、祇園社の牛頭天王（龍神）は疫神の性格をおびざるを得ないであろう。神の依代「山鉾」の壁代ともいうべき懸装染織品に「龍文様」を好み続けた町衆たちは、遠い世の伝聞伝承を信じて、龍神への祈りを奉げ続けてきたのである。

二 御霊会と山鉾の合流

平安奠都以来、都の造営と治水工事は、鴨川、堀川等の流路変更を迫られたし、水源地の森林伐採は雨期の氾濫を惹起して、これが疫病をもたらす原因ともなつたであろう。素戔嗚の八岐大蛇退治は治水の暗喩とされるから、祇園社の祭神に素戔嗚を迎える文脈は十分に伏在していたように思われる。奠都七十年後貞観十一年（八六九）、卜部日良麻呂は、日本国数六十六ヶ国にちなむ鉾六十六本を作らせ、宮中の雨乞いの場であつた神泉苑にそれを立て、牛頭天王を祭り、疫病の因をなした牛頭天王（龍神）の怨霊を水に還した。これを祇園御霊会の起源とする傍らに、素戔嗚神話を忘れずに見据えておきたい。

十世紀の終りに雑芸者「無骨」というあやしげな軽業師が、この御霊会に大嘗会の標山を摸したものを曳出したこと。十一世紀のはじめには、神輿の後に散葉車が登場したこと、そして大治二年（一二七）の御霊会について『中右記』がしるす「四方殿上人、馬上、童、巫女、種女、田楽各数百人、此外、祇園所司、僧、隨身数十人、兵供奉す、舞人十人、使唐鞍に乗る。凡そ天下の過差計すべからず、金銀錦繡、風流美麗、記尽すべからず、両院、按察中納言、三条室町の棧敷において見物」、こうしたことを踏まえて、林屋辰三郎「祇園祭の歴史」には、十二世紀にいたつて祇園会の行粧は盛大と

なり、これを見物する楽しみが京洛をにぎわせたという指摘が見られる。



図2 模本年中行事絵巻、巻九 祇園御霊会

神主、風流傘、馬長^{メナカ}等の行粧と見物の大衆が描かれている。(図2) 祇園御霊会に山鉾風流が出現したのは南北朝期のことであり、動乱のさなかに「座」の形成を表現させてゆく民衆の動きがこれを可能ならしめた。『中原師守記』に「暦応二年(二三〇〇)鉾以下以下の外結構、歩田楽あり。貞和元年(二三四五)定鉾例のごとく、

この初期祇園御霊会の状況を知らしめる絵画として平安

時代も末近い十二世紀後半に

描かれた「年中行事絵巻」の

巻九、巻十二がある。現存の

ものは江戸前期の模本なのは

惜しまれるが、そこには編

木に笛太鼓で踊る田楽衆、大

幣をかつぐ童、風流傘をさし

かけられた馬上の巫女、腹巻

に水干姿の犬神人、舞楽に獅

子舞、四本の鉾には巴紋の比

礼、鳳輦の神輿が二基と葱華

輦の神輿が一基、宮主、細男^{ヒヨコ}

山以下渡る。貞治三年(一三六四)鉾以下冷然久世舞車これあり、

作り山風流等なく、定鉾許り也⁽³⁾とあること等にその根拠は求めら

れる。これを補充する新資料として、北観音山を曳き出す『六角町

文書』に、山の依代である真松についての記載がある。

松入所は上嵯峨大門堺町かた原町図子くわん光寺村、文和二年

癸巳(一二五三)六月与、善休相勤。善休子、宗休、宗休子、

鬼助^{宗休子 弥兵衛後二鬼助と云。}、嘉兵衛。伊兵衛兩人共相勤。

伊兵衛子、喜兵衛。喜兵衛子、ひげの喜兵衛。

これは七代にわたり上嵯峨の仙人、善休の同族が松入役を務めて

いたという記録である。⁽⁴⁾

観音山の名が祇園社記に初めて記されるのは文安四年(一四四七)

であるから、その九十年も前に観音山が存したことになるが、これ

を曳き出す六角町には、嘉禄三年(一二二七)以来、六角町生魚供

御人として湖魚の専売権を許されており、当時は十余人の女主人が

これを商い、その働きを背景に山車を曳き出していたのである。

当時の条坊のメインストリート町通り(現新町通り)は、三条町

の「綿座^{ワタザ}」、四条町の「切草座の棚」等、特権商人の意気には盛ん

なものがあつた。室町時代の祇園会を録した諸記には、それまで人

気的であつた、馬長^{メナカ}や田楽^{メナカ}については記すところがなく、人々の

目は山鉾風流に集中していたことが察せられる。

こうして応仁の乱が起る頃になると、山鉾風流はすでに定着し

て、山鉾の数は六月八日に五十八、六月十四日に二十七の多きをかぞえた。そして明応九年（一五〇〇）三十三年ぶりの祇園会には総数三十七基にまで復興している。応仁の乱前後に山鉾の必要としたおびただしい数の懸装染織品には、どのような品々が使われたか、またその調達にはいかなる方途があったのか。これについての記録は十七世紀末、十八世紀初を待たねばならず、それ以前の姿を知るには、平成のこんにち三十二ヶ町に現在する中国大陸文化圏の絨毯、毛綴、若干の金欄を絵画資料と照合し、同定を試みる以外に方法がない。

三 交易のあと

すでに室町幕府代々の将軍は棧敷を設けて祇園会を見物するのを例年のこととしていたが、能役者藤若（世阿弥の幼名）を伴って見物した足利義満が入道して道義を名のり、明の永楽帝に交易を求めたのは、応永十年（一四〇三）であり、それに答えて送られた明朝の龍袍が、中国の文物に懂れた義満の目にいかばかり映えたか、われわれの想像を越えるものがあつただろう。

永享四年（一四三二）義教が再開した勘合貿易は、大内氏をはじめ西国の守護、五山南都の僧、兵庫堺の商人たちを競って寧波（ニギハ）へ向かわせた。輸出品の主たるものは、太刀、扇子、銅、硫黄、屏風、漆器、鎧、琥珀、蘇木等であり、一方大陸よりの輸入品は、白糸、

綿糸、布、綿紬、繡紅糸、水銀、針、鍊鉄、鉄鍋、磁器、古書、古画、薬材、氈毳、馬背氈等であつた。これは川島元次郎氏の記述するところながら、残念なことに、文献の明示を欠いている。⁵⁾ 祇園会山鉾の懸装染織品への興味をもってこうした品目を見れば、氈毳、馬背氈とあるのが気にかかる。毛製品は産毛動物の飼育のなかつた日本には、正倉院に遺る人物文、団花紋のフェルト以外に平安寛都以来、室町まで、その存在は知られていないからである。

一方朝鮮との関係は、南北朝動乱期の経済事情によって発生した対馬、壹岐、松浦を拠点とする倭寇取締交渉にはじまるが、応永十一年（一四〇四）道義（義満）は、日本国王として僧周棠を派遣したということがある。これが朝鮮国王との対等な交隣関係の最初であつた。この対等の冊封体制を基盤に、朝鮮は正長元年（一四二八）義教の將軍職襲位を祝うために、通信使を派遣したといふ。⁶⁾ 一方、日本国王使の派遣は永禄十年（一五六七）義昭の遣使まで、実に六十余回に及んでいる。その目的は朝鮮国王の慶弔、大藏経や仏典仏具の求請、貿易に関するものであつたし、西日本の守護大名、大内氏等も積極的に朝鮮との通交を求めたのであつた。李氏朝鮮は、室町時代に永享十一年（一四三九）、嘉吉三年（一四四三）、長禄三年（一四五九）、文明七年（一四七五）、文明十一年（一四七九）の五度にわたつて通信使を日本に派遣したようである。朝鮮のほうでも、倭寇対策として貿易の道を開く必要を認め、釜山、熊川、蔚山の三港

を指定し、倭寇とその背後の勢力の懐柔策として、民間の貿易商人や大内氏等に私貿易の道をひらいていた。特に対馬が発給する渡航証明を持つ者だけにそれを許したため、対馬藩は発給権を利用して莫大な利益を得たばかりでなく、歳遣船の派遣にまで采配をふるっていた。姜在彦氏によれば、朝鮮の主たる輸出品は、木綿布、絹布、麻布、仏典仏具、虎皮、人参のほか奢侈品を含み、日本からは、銅、銀、鉛、硫黄、染料、香料、薬材を輸出したが、その中には南蛮貿易品も含まれていたのである。対馬藩は永正九年（二五二二）に壬申約条を成立させ、交易港として当初は熊川を、後に釜山を加えて指定され、それ以来、対朝鮮貿易は対馬が独占することになった。室町時代の対朝鮮交易の実体、とりわけ輸入品の品目および数量、通信使の献上品の内容を明確に把握することができれば、そのなかには山鉾の懸装品に使ったものがあるに相違ない。しかし、いまのところ詳細は不明とせざるを得ない。山鉾町に朝鮮綴、朝鮮錦として伝承されている染織品の実体解明には、なお時日を要するであらう。

四 室町絵画に見る祇園会

△ 模本「月次祭礼図」の懸装品（東京国立博物館蔵）

原本は土佐光信作と考えられているもので、光信は文明元年（二四六九）に宮廷絵所預りとなり、明応五年（二四九六）刑部大輔、文

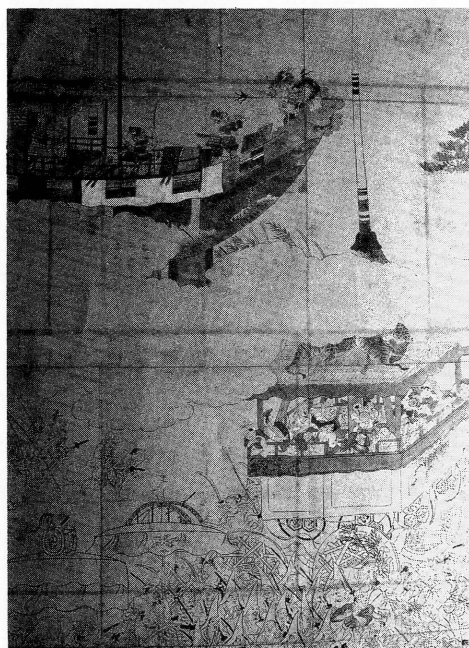


図3 模本月次祭礼図（東京国立博物館）第六扇部分図

亀三年（二五〇三）従四位下の画家最高位を極め、大永二年（二五二二）頃没したと伝えられていることから、原本は十五世紀後半から十六世紀初頭頃の作ではないかと思われる。（図3）

この屏風絵の第五扇下方三分の一から、第六扇に祇園会が描かれており、そこには室町期に人気を博した乗牛風流、鷲舞、鵲鉾、傘鉾、名称不明の昇山一基、放下鉾かと思える鉾に船鉾、鶏鉾らしい鉾頭が描かれている。

昇山の懸装品は真松を立てる山洞に二種の錦、人形の立つ添山も錦かと思われる布で覆われているが、山洞の錦は袷姿を転用しているように見える。山の胴部には二段二種の布を引廻しており、上段は模様入の錦、下段は色無地の薄手の布。裾幕は白地に唐花七宝紋

の幔幕である。

放下鉾とおぼしき鉾車は、屋根上の網隠しに虎と豹の毛皮を交互に六枚ほどを薄青色の布の上に垂れ懸け、屋根下の水引は赤無地の布、欄干下の水引は薄青色地に牡丹唐草の錦か緞子、胴懸の前・後は一枚物で薄青色地に虎文様の絨毯を横使い。左右は二枚横継ぎで縁付の厚手布、これは絨毯であろう。裾幕は白地の丸に唐花亀甲紋の幔幕。船鉾は欄干下に水引を二段引廻し、上段は薄青色地に瑞雲文様の錦か緞子、下段は薄紫色地に唐草文様の錦か緞子で、胴体中央部は紅白の布に鎧の袖を二枚継いで五種類、等間隔に垂れ下げている。更に紅白布の下から、厚手赤地の布、これも絨毯であろう。

舳には虎と豹の毛皮を二枚。裾幕にも絨毯らしきものを立継ぎに使っている。これらを現在の船鉾の懸装に比べて見ると過剰と思えるほどに多種にぎやか。

鵲鉾の垂りは鳳凰に雲文様の錦が風になびく。傘鉾の垂りは無地布で二段に垂れ廻している。以上が懸装上の所見である。

模本、月次祭礼図で重要な点を記せば、

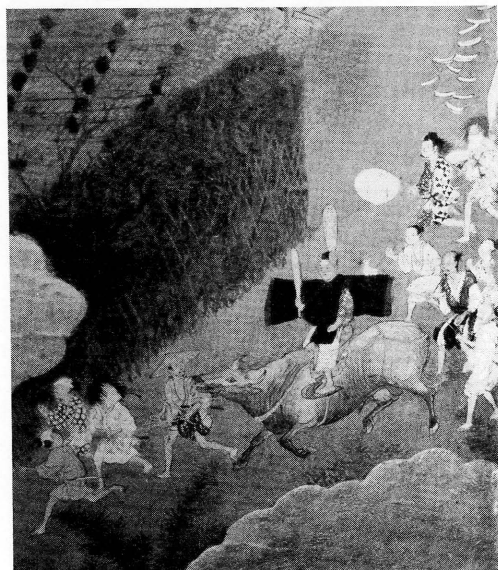
- 一、虎、豹の毛皮を多用している。
- 二、山洞に袈裟を原形のまま転用している。
- 三、畳一帖大の絨毯を鉾の胴懸に使用している。
- 四、水引に錦か緞子を横に引廻している。
- 五、鎧の袖を懸装品に転用している。

の五点であり、特に一から四はすべて中国、朝鮮からの輸入品であることであろう。

原本はさぞや美しかったろうと思うことしきりであるが、いたし方なし。序ながら、鉾舞台には多勢の若衆が乗り込んで、舞い踊る二人の羯鼓稚児、鼓、薄胴鉦打太鼓に笛の囃子方、この場合現在の祇園囃子を盛りあげる「鉦」は囃子楽器に加わっていないことと、赤熊シロクマの一人を除いて皆烏帽子を被っていることは古様を示しているといえよう。

△ 祇園・山王祭礼図屏風の懸装品（サントリー美術館蔵）

これは近年蒐集された屏風絵である。（図4—ABC）田沢裕賀氏によれば、土佐光茂の画風に近いところがあり、天文十三年（一五四四）に流失した四条橋の西に祇園社一の鳥居も描かれていることから天文年間（一五三—一五五）をさほど降らない時期の作品といわれている。画中の山鉾の懸装、囃子の形態より見ても先の月次祭礼図に次いで祭の古様がうかがえる。祇園会の双は、縦一三八cm×横三一二cmの六曲画面いっばいに、三条通り、寺町通り、四条通りがコの字形をなすように構図され、還幸祭の行粧は乗牛風流を先頭に寺町通りを南下、三基の神輿は絃召ツルメツ、駒形稚児、神官、雑色等に先導され、三条通りを東向中であり、先頭の長刀鉾は寺町仏光寺あたりまで進んでおり、函谷鉾、保昌山、占出山、菊水鉾、月鉾は四

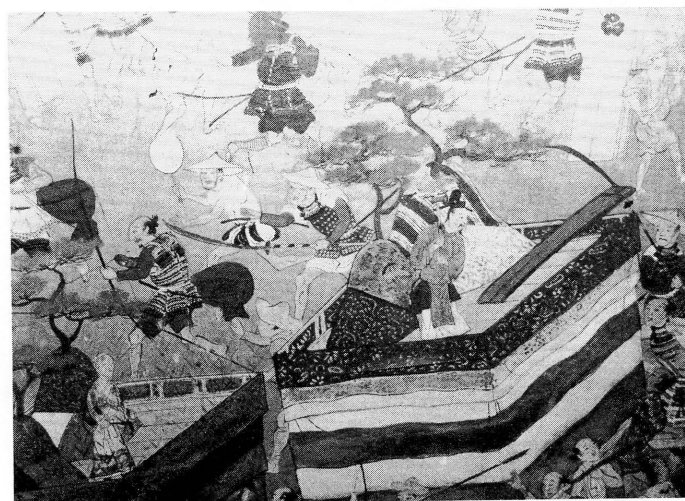


C 乗午風流



図4 祇園・山王祭礼図 サントリー美術館本

A 鶏鉾



B 伯牙山と芦刈山

条寺町の辻にあり、続いて綾傘鉾、蟻螂山、白楽天山、鶏鉾、孟宗山、伯牙山、芦刈山、放下鉾は四条烏丸にあつて、岩戸山、船鉾があとに続く。山鉾の数は十六基でこれは先祭の巡行列。後祭は、画面左上方に橋弁慶山、淨妙山、鷹山、観音山、鯉山、鈴鹿山の六基を数える。この画面では鉾と曳山のすべてを登場させているのがまことに貴重である。また長刀鉾を屋根の一部と鉾頭のみで表現しているのは特異というべく、構図上の配慮は心憎いばかりである。他の洛中洛外図が粉本に基づくせいか、祇園会の表現が観念的であるのに対して、この画面は室町後期の祇園会を細大洩らさず描いていて、その全体像を見せてくれるばかりでなく、細部もまた山鉾の懸装、囃子の情景にいたるまで、実に緻密に描ききつている。特に屋根上の網隠しと胴懸の絨毯をこれまで緻密丁寧に描いた作例は他に求め得ない。懸装品の実体を自分自身の目で確かめなくては、とてもこうは描けまいと思われる。

まず網隠しを見れば、それは色とりどりの袈裟袈裟ではないか。縁取り、四天はもとより、田相部まで描きこまれている。地色こそ、赤、白、緑、ベージュと単純化しているものの、牡丹唐草、蔓唐草様の表情も、實際をうかがうのに充分なほど生彩をおびている。袈裟は昇山の山洞、添山、各鉾の見送りにも使われており画中にその数をかぞえれば四十枚余にもおよぶのである。

袈裟をかように用いていることを確かめ得たのは望外の悦びだと

いうほかはない。なぜなら、日朝貿易の輸入品の中には、大藏經、仏典のほかに仏具があつたという姜氏の記述に符牒するからである。仏教国たる高麗王朝から儒教を信仰する李氏朝鮮にと世が移つて、大量の仏典仏具が不要となつた時期に、五山の僧達袈裟を見のがすわけがない。それは彼等の最も尊ぶ仏具なのであつたから。

どのような経路でこの袈裟を町衆が購入したかは解らないにしても、袈裟は山鉾の天上近く、鉾なら網隠し、山なら山洞の部分に使われ、また懸装品としては、見送りという山鉾の背面に懸ける最も晴れがましいものに限つて使われているのは、町衆が袈裟というものの扱いによほど心していたことを伝えている。

残念なことにこの袈裟類は過去七年間の調査で一点も発見し得ていないばかりか、江戸中期からの古記録にも全く記載がない。強いそれを求めれば、宝曆七年刊の祇園会細記の山伏山、前掛、幔幕の項に、

まんまく也、左右赤地古金欄安楽庵紺地色紙切雲に鳳凰のもよう。中の切之渡り金地金欄

左右共まんまく赤地古金欄金地銀欄色糸もやう色紙雲に鳳凰のもよう唐縫なり。

と記され、これは雲に鳳凰の刺繍裂地に、色紙形の赤地金欄、紺地

(……、◎印は筆者による)

安楽庵、金地銀欄をアツプリケとして全面に散らしている幔幕で、そこに使い古した袈裟の部分を利用していると考えられる。

『祇園・山王祭礼図屏風』によって、はじめに確かめ得る袈裟を用いた懸装法は、いかにも古様なのである。なるほど上杉家本の洛中洛外図を見れば、屋根上の網隠しに錦裂が二種描かれているし、山洞や添山も異種の裂で覆われてはいるが、縁取や四天までは描かれていないので、それが袈裟であるとは誰も気が付かなかつた。永徳筆と言われるあの洛中洛外図は、殊のほか生き生きと室町末期の下京を描き「面白や花の都」と岡見正雄氏をして言わしめた優作ではあるが、それとて粉本に基づいており、永徳がじかに懸装品を見たかどうかは疑わしいのである。

それにしても李氏朝鮮から輸入した袈裟を原形のまま懸装に転用するとは、明応九年の山鉾再興が急拵えであったという伝えと一致しているようにも思えるし、尾張・津島神社の祇園会が小袖を懸装品として使った事実とも合致する、懸装の古様というべきである。

画中の鉾の前懸、胴懸に目を移す。

前懸にはほぼ畳一帖大の絨毯を三枚立継ぎに、胴懸は四枚立継ぎにかけている。前後の面は狭く、左右の面は横に長大であり、縁を取付けず絨毯のまま使うのだから、かような使い方は当然と思われる。曳山の岩戸山は青幔幕で胴部を飾り、前懸中央にのみ一枚の絨毯をかけている。同じく曳山の観音山は前懸の左右と胴懸の左右を

絨毯としているのは、作者の遊びなのかもしれない。というのは、鷹山の胴懸は四枚の絨毯を立継ぎとしており、この絵以外に観音山の懸装に見るような懸装方法の実例も資料も見あたらないからである。描かれている絨毯の主文様は、梅樹、獅子、虎、団花で、いずれも中国系絨毯の図柄。鳳凰、梅ヶ枝に鳥、牡丹、霞取のほかには文様不明の複雑な図柄も見られるが、これらは朝鮮綴とその名を伝承しているものの図柄と考えられる。細かなことながら見落してはならぬのは、主文様の四隅が蕨手になっていくことである。これは現存する中国系絨毯の図柄における典型的な特徴の一つなのだから。そして画中に明確に描かれた絨毯三十一枚のうち二十三枚に蕨手の表現が認められる。

主文様をとりかこむ、額と枠を見ると、牡丹唐草としているのが十一枚、外枠を雷文崩しにしているものは十枚をかぞえる。

額枠共に無地としているのは十枚あって、それは現存中国系絨毯の額が斜格子あるいは八角飾連文と複雑に過ぎるため、極めて小さい画面細部にそれらを描き込むのは不適當としたものかと考えられる。唐草の額は六枚、アラビヤ文字様のもの二枚をかぞえることができる。

鉾七基の前懸、胴懸に描かれている絨毯には、現存する中国系絨毯の色、主文様、四隅の蕨手、額の牡丹唐草、枠の雷文崩し等が正確に再現されており、作者自身が懸装絨毯類に心を動かされながら

画稿を作りあげていることが想像される。もつとも、例えば月鉾の胴懸に描かれている絨毯が、現在月鉾に現存する中国系絨毯と同じ図様表現となっていないことも事実であり、先述したことは、現存する中国系絨毯の全体像と、画中の絨毯とを対比させての考察である。

△ 現存中国系絨毯一覽表

主文様	額	外枠	所蔵山鉾名	墨書
蕨手 虎に梅樹	牡丹唐草	雷文	函谷鉾	
蕨手 双虎	牡丹唐草	雷文	函谷鉾	
十華	牡丹唐草	雷文	長刀鉾	
蕨手 梅樹	牡丹唐草	雷文	長刀鉾	
蕨手 玉取獅子	斜格子	雷文	長刀鉾	
蕨手 玉取獅子	アラビヤ文字	雷文	函谷鉾	
蕨手 玉取獅子	アラビヤ文字	雷文	函谷鉾	
蕨手 玉取獅子	牡丹唐草	雷文	南観音山	
蕨手 玉取獅子	斜格子	雷文	月鉾	
蕨手 玉取獅子	牡丹唐草	雷文	函谷鉾	
蕨手 玉取獅子	八角飾連文	雷文	油天神山	
蕨手 玉取獅子	八角飾連文	雷文	岩戸山	
蕨手 玉取獅子	八角飾連文	雷文	月鉾	
蕨手 玉取獅子	斜格子	雷文	鶏鉾	
蕨手 玉取獅子	八角飾連文	雷文	鶏鉾	

△ 現存古様朝鮮綴一覽表

主文様	副文様	天地縁	所蔵山鉾名	墨書
蕨手 玉取獅子	大斜格子	雷文	月鉾	
蕨手 玉取獅子	斜格子	雷文	長刀鉾	
蕨手 玉取獅子	斜格子	雷文	鶏鉾	
蕨手 虎に梅樹	八角飾連文	雷文	鶏鉾	
蕨手 虎に梅樹	斜格子	雷文	鶏鉾	
蕨手 虎に梅樹	斜格子	雷文	函谷鉾	寛永十八年
蕨手 虎に梅樹	斜格子	雷文	函谷鉾	
十華	八角飾連文	雷文	月鉾	
梅枝に小鳥	鶴	無地	長刀鉾	
鳳凰に牡丹	鶴	稻妻	南観音山	
鳳凰に牡丹	鶴、鵠	稻妻	南観音山	
鳳凰に牡丹	太陽、鹿、靈芝、八弁花	稻妻雷文	放下鉾 拜対馬	
鳳凰に牡丹	鶴、連華	月鉾		
鳳凰、双虎、牡丹	鶴、鵠	月鉾		
鳳凰、虎、牡丹	鶴、鵠、梅	函谷鉾		
鳳凰、虎、牡丹	鶴、鵠	放下鉾		
鳳凰に牡丹	鵠、靈芝	放下鉾		
鳳、虎、牡丹	熊、獅子、鶴、鵠	月鉾		
鳳、牡丹	鶴、菟、獅子、鵠	長刀鉾		
鳳凰、太陽、牡丹	梅枝、蝶	岩戸山		
		雷文	鶏鉾 寛永十五年	

以上二点(図5—ABC)



B 古様中国系絨毯 玉取獅子文様胴懸・南観音山

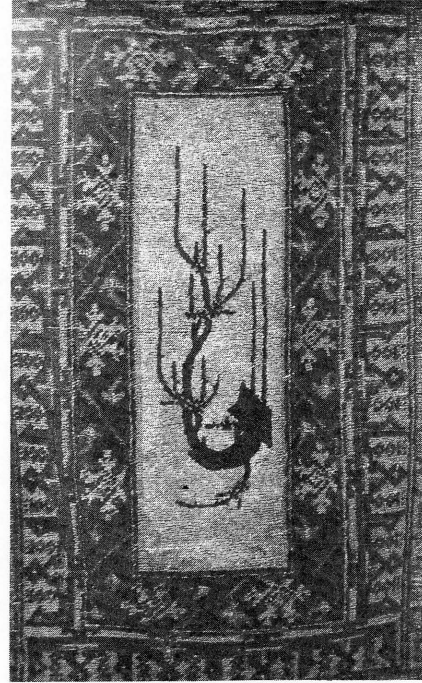


図5 A 古様中国系絨毯 梅樹文様胴懸・長刀鉾



C 古様中国系絨毯 虎に梅樹文様胴懸・鶏鉾

この「祇園、山王祭礼図」の祇園会では、毛皮の使用例は鶏鉾の網隠しに豹皮を一枚、船鉾の舳に虎皮と豹皮の二枚を描くのみである。「月次祭礼図」のように網隠しに六枚もの毛皮を使用していたとは違って、古様を残しながらも、一方では錦繡による懸装が多用されていて、こういうところに世の移ろいがおのずとあらわれているように思われる。

画中の裾幕は、藍地に白抜きの波紋、鶏紋、丸に笹紋、丸に鱗文となつている。これは懸装を目的として紺屋が染めたものかとも思われるが、孟宗山の裾幕に風抜きが描かれている事からすれば、地白でなくともこれは幔幕の転用と見るのが妥当だろう。

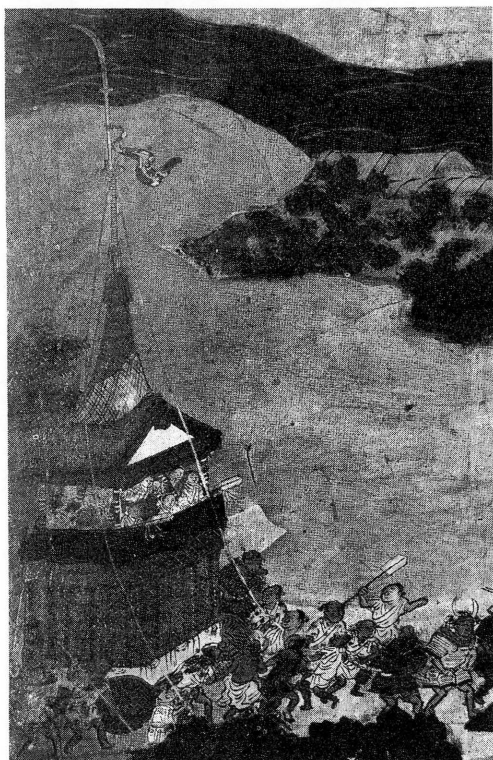
この屏風絵の作者は、風俗描写にも非凡な腕を示していて、鉾舞台の囃子の情景もまた優れている。町田家本や上杉家本の洛中洛外図（後述）に比べると鉾舞台の情景も描きこむに充分な空間を確保し、金烏帽子の羯鼓稚児がふたり一緒に舞っている鉾も描けば、ひとりとは休息して群衆を鉾上からながめている鉾も描いている。鼓は二丁、笛が二管、締太鼓が一丁、そして新しく撞木で鉦をたたく鉦方がはじめてここに登場する。赤熊を被っている四人の若衆以外は烏帽子を被っていない。これも「月次祭礼図」とは異なり、古様を残しながら、風流に新趣向の採用をうかがわせるような画中の情景である。

船鉾、曳山の岩戸山、鷹山には囃子方は描かれていない。これは

上杉家本にいたるまでも同様であつて、祇園囃子の原型は、羯鼓稚児の舞を主にしたものであつたことが理解される。船鉾や岩戸山、観音山に囃子が伴うのはいつからのことか、興味深い問題といわねばならない。

サントリー美術館本の『祇園、山王祭礼図屏風』の祇園会があまりにも生き生きと、緻密に美しく描かれているので、思わず事細かに所見を述べることとなつた。私はこの屏風絵に「絵そらごと」と言い捨ててしまえぬ感興をいまもおぼえるのである。（図4—A B C）

大永年間頃の景観を描いたとされる国立歴史民俗博物館甲本（旧町田家本）の洛中洛外図とその三十数年後、天文年間末から永禄にかけての景観によるとされる上杉家本の洛中洛外図は、基準作として、いずれも重要至極ではあるが、こと祇園会に関する限りこの二屏風で満足するわけにはゆかない。いずれの屏風も祇園会を下京の重要歳事として取り扱い、四条仮橋を渡る神幸祭の武者風流と神輿渡御。四条通りから寺町を南向し松原を西へと進む先祭の山鉾を描いているが、上杉家本に描かれている山鉾は町田家本よりもわずかに三基多いばかりであり、祭の描き方に両者の間に格別の変化も認められない。歴博甲本が静けさをただよわせているのに対して、上杉家本はざらざらとして熱気を加えているに過ぎず、両者に見る山鉾の懸装方法も基本は同じである。個条書きで示せば、一、網隠し、



B 長刀鉾 上杉家本

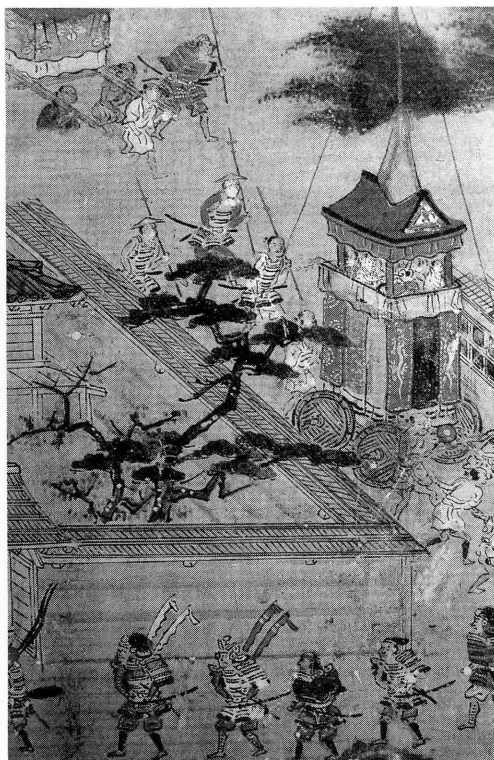
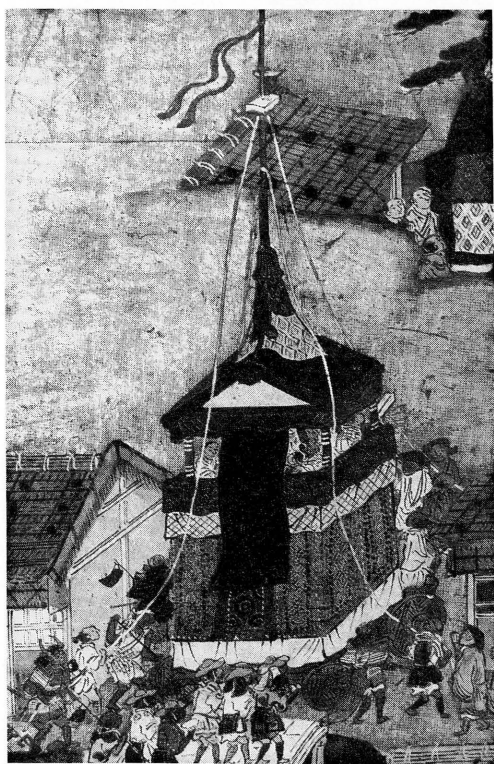


図6 洛中洛外図 A 長刀鉾 歴史民俗博物館甲本



C 鶏鉾 上杉家本

山洞、添山に錦地を使用しているかに描かれている。二、各種の水引幕は錦地を横に引廻す。三、鉾の胴部は絨毯を三枚立継ぎとしてゐる。四、懸装品の文様表現は、サントリー美術館本「祇園、山王祭礼図」の祇園会のそれに比して概念的である。五、神幸祭の乗牛風流が描かれていない。歴博甲本の特徴として目に留まるのは、

一、各鉾の胴懸の文様には、獅子、団花、牡丹のほか龍が加わっている。これは祇園社の神が龍神であることを示唆し、それと同時に、中国系絨毯の主文様、朝鮮綴の複雑な図柄から特に牡丹が抜き出されたことを示している。

二、蟠螂山が御所車を直接昇いでゐる。

上杉家本の特徴として目に留るのは、

一、鉾の胴懸は中国系絨毯と見え、その色が焦茶に統一されている。

二、画中の絨毯は二十枚を数えるが主文様の表現は具体性を欠く。ただしその内の二枚は、梅枝に小鳥という朝鮮綴の図柄になっている。

三、東向する山鉾の背面に見送りを描き、函谷鉾のそれには虎皮を垂らしている。

四、蟠螂山の御所車が山舞台の上に乗っている。

五、網隠しは二種の錦を描いているが袈裟の表現になっていない。

六、鶏鉾の後懸中央のものは円紋を伴う真つ赤な厚手布に表現し

ている。

これをサントリー美術館本と比べると、総じて新しいことが描き加えられていない。ただ一つだけ、鶏鉾の後懸けに真つ赤な厚手の布が描かれているのは重要な新事実とすべきであろう。なぜなら、この赤い円紋を伴う布は絨毯ではなく、赤地の綴錦と思われるからである。この文様構成は中央に円紋、四隅が四分の一の円弧となっており、現存の占出山蔵、円紋花鳥図綴の見送りと同一構図である

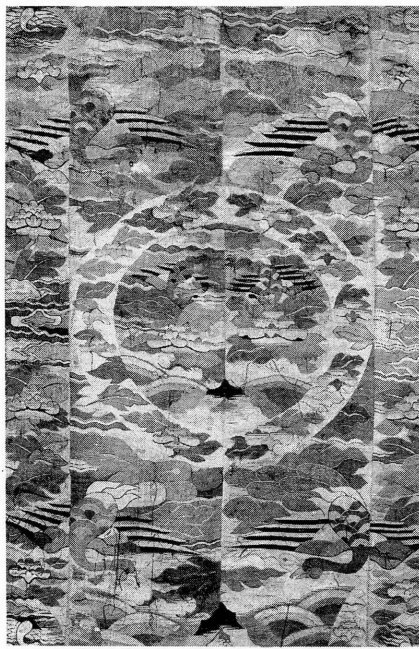


図7 円紋花鳥図綴錦、見送・占出山

ばかりか、やや後年に過ぎる記述であるが、宝暦七年の祇園御霊会細記の山鉾由来記、鶏鉾の見送り項に、「綴錦もやう丸輪のうちに奇鳥二ツ向い合せ其外諸獣あり」とあるのと一致する。この種の裂が好事家の裂帖にしばしば貼り込まれているのと合せ考えれば、

十六世紀中頃に中国より輸入されたこの種の赤地綴錦が祇園会に初登場したことを知らしめるこの描写も貴重である。(図6-C)

五 江戸絵画に見る祇園会

△ 勝興寺本洛中洛外図の懸装品

慶長八年築城の二条城を中心に構成された勝興寺本の右双に描く祇園会は懸装品の実体にふれる作例として見のがせない。室町通りを四条に向かう菊水鉾、四条を東向する傘鉾、油天神山、蟻螂山、寺町を南下する白楽天山と月鉾、松原を西向する長刀鉾の七基による先祭巡行の情景、左双には二条城前を通過する還幸祭の情景が描かれる。(図8-A B)

風俗画としての特徴は次の点にある。

- 一、袴姿の音頭取が一人、白扇と笹をかざして曳子を指揮している。
- 二、鉾の後に牛に曳かせた大八車が続ぎ、それには梯子と白が積んである。
- 三、雑色が幔幕文様の素襖を着ている。

この三つは勝興寺本が示す祇園会の新しい風俗である。

画中の山鉾懸装品についての特徴は、

- 一、昇山二基に山洞と添山も描かれて古様を残しているが、その懸装は観念的で繁縷にすぎる。



B 月鉾



図8 勝興寺本洛中洛外図 A 菊水鉾

二、網隠しに緋羅紗の使用が認められる。
三、欄縁が使われている。

右の二、三項は江戸初期の洛中洛外図におけるこれが最初の事例である。

四、鉾の胴懸は二枚立継ぎでその図柄は朝鮮綴の主文様を的確に描写しており、菊水鉾の胴懸は番の鶴、牡丹と霞取とともに、江戸初期の朝鮮綴のよく整頓された図柄になっている。番の鶴に描かれているのは、実際は鳳凰なのであるが、それにしても朝鮮綴の胴懸をこれほど詳細に再現描写しているのは特筆に値する。



図9 古様朝鮮綴・鳳凰、月、牡丹図後懸・鶏鉾
寛永15年銘

五、月鉾の欄縁下の水引が龍文様になっているのは、山鉾に使う懸装染織品にこの文様が初登場する事例である。

図9は寛永十五年（一六三八）在銘の鶏鉾に現存する朝鮮綴である。裏面には「寛永拾五年六月二日 寄進 鹿増宗茂 鶏鉾町三枚内」と墨書されている。鹿増宗茂は鶏鉾町定法度（文禄五年より寛永十五年にいたる）の寛永十年（一六三三）の記事に自署花押している人物であり、鶏鉾町在住者が朝鮮綴を一根立したことの明白な証拠である。現存するのはこのうちの二枚で図柄は、鳳凰に月、牡丹を主文様に、蝶、靈芝、鵲に菟。鳳凰に日輪、牡丹、蝶、梅樹で赤と白、焦茶、藍に大きく霞取に織分けられている。先に指摘したように鳳凰が勝興寺本では鶴に変わっているとはいえ、現存のこの綴と画中の綴の構図は類似を越えている。描かれたのはまさに挿図に示した朝鮮綴そのものである。サントリー美術館本「祇園、山王祭礼図」の網隠しに垂れ懸けられた錦地の袈裟。胴懸の中国系絨毯と同様に、勝興寺本「洛中洛外図」の胴懸の朝鮮綴は、最も忠実に懸装染織品を表現した絵画資料として注目に値する。（図9）

室町中後期から江戸初期にかけては、ペルシャやインドの真っ赤な絨毯は使われておらず、この期の山鉾懸装品に用いられたのは、勘合船、朱印船、対馬の歳遣船、私貿易船による輸入品か、あるいは朝鮮使節の献上品のなかから選び抜かれた中国系絨毯、朝鮮綴、錦の反物、古袈裟なのである。

その第一扇中ほど、江戸城本丸近くに、龍文様の形名旗と清道旗の林立するそばに、朝鮮通信使が將軍への献上品を六台の献物台に並べている情景が認められる。(図10) その一台には赤色厚手の敷

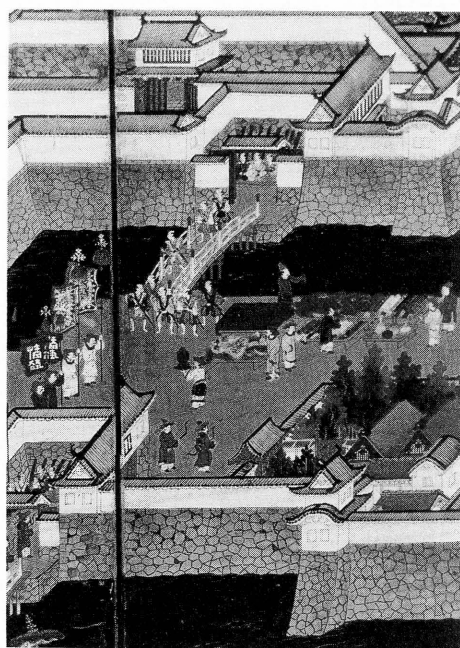


図10 江戸図屏風・朝鮮通信使献上品
歴史民族博物館本

当時の日中、日朝交易品の実態をうかがわせる資料が購入記録、献上目録を伴った第一次資料として世に出ることを切望する、と私は先に記した。これまでのところ、私が交易の一斑をうかがうに活用したのは、室町期および江戸初期の絵画資料、購入新調記録を伴わない現存の古様中国系絨毯、朝鮮綴という伝承名を伝える品々のうち、放下鉾に現存する「拝対馬」と墨書銘のあるものなどにすぎない。補助的な絵画資料としては、国立歴史民俗博物館蔵「江戸図屏風」がある。

物が積まれており、虎皮の重ねが一台あったり、豹皮らしいものの上に灰地に斑紋のある毛皮を重ねたものがあつたりする。色とりどりの錦地の反物二十ばかりが献上台二つを占めている。陶磁器の瓶子や青銅の注器、赤漆の大台子も見える。一人の使者が持つているのは大香炉なのだろうか。献上品の赤地の敷物は、厚手で波うつように描かれていて、これは絨毯あるいは毛綴、いわゆる朝鮮毛綴に間違いなからう。この赤は茜か蘇芳で染めた赤であつて、数百年を経た現存のそれは、完全に退色して、ページュあるいは薄橙色の退紅色になっている。毛は比較的に染色性が良いから、当初は「江戸図屏風」に描かれた敷物のごとく真っ赤だったのである。

以上のことから推して、毛を素材にした敷物は朝鮮半島にも存在し、それが日本に渡来した可能性は否定できないだろう。勝興寺本の作者はそれを知つてか知らずしてか、山鉾風流に用いられたこの種の渡来品に着目して描き残してくれた。うれしいことではないか。この屏風をよく見ると菊水鉾の欄縁下の水引も色彩豊かで、金地の朱格子に牡丹と四弁花も美しい。これは金入錦織の高級反物が使用されていたことを伝えている。勝興寺本以後の洛中洛外図や祇園祭礼図は数多く遺されているが、概念図に過ぎて資料価値にとぼしいものが多いのは残念である。粉本に頼らずに作者その人の目で描いてくれればと惜しまれてならない。

寛永十六年(二六三九)以降しばしば鎖国令を發布する徳川政権

も、交易のとだえることを望んだのではなく、オランダや中国にはむしろ積極的に交易を求めた。日朝交易も対馬藩宗家を通じて白絲や絹生地を主品目に錦地等の端物^{ハキ}の輸入を行なったのであった。勝興寺本には鉾の網隠しに赤羅紗Ⅱ猩々緋の使用が認められたことはすでに記したが、これを初めとして懸装品に羅紗の使用は急増したであろうか。

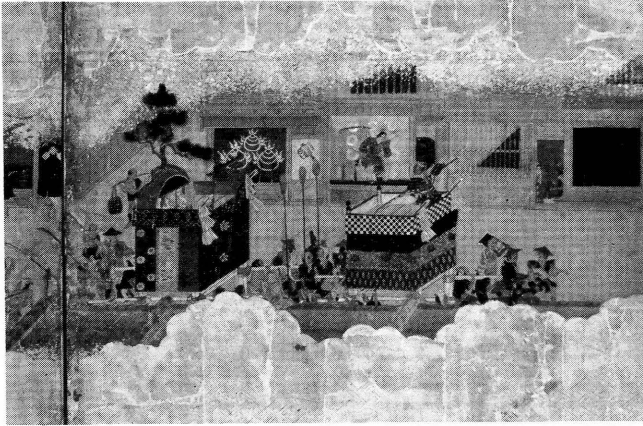


図11 祇園祭礼図・部分図 八幡山本

△ 八幡山本祇園祭礼図

明暦年間（一六五〇年代）に海北友雪^{カイホク}によって描かれたという祇園祭礼図には、四条寺町を祇園社へ向かう還幸祭の行粧と三条通りを東へ向かう橋弁慶山を先頭に凱旋船鉾まで後祭全山鉾の巡行の情景が描かれている。（図11）

この祭礼図に見られる山鉾の特徴は、

一、山洞（添山は無くなっている）にはすべて赤羅紗Ⅱ猩々緋と思われるものが使用されている。

二、山の懸装方法が水引四段を横に引廻している山と、欄縁下の水引のみ横引廻しとして、その下を三本立継ぎとしている山とが入りまじっている。これは多種類の懸装染織品の入手が可能となったためか、昇山の懸装方法に変化が生じている事をうかがわせる。

八幡山本の水引や胴懸の文様や色彩は、はやかではあるが、その表情は板に張り付けたように堅く、織布の感じに乏しい。はたしてここに描かれているような文様の錦を、実際に使っていたかどうかは、はなはだ疑わしい。山洞すべてに猩々緋らしいものを使っていると先には記したが、これも第一次資料に基づく確認が必要とされよう。

六 山鉾町伝来文書等を読む

幸いなことに十七世紀末から、懸装品の新調記録が各山鉾町でおこなわれるようになり、町有文書として残った。もっともその多くは、宝永四年（一七〇七）の大火以後の文書である。

長刀鉾町の道具拵覚帳に、貞享元年（一六八四）木綿三匹を購入し、茜で赤に染上げ網隠しを新調した由の記載がある。その値、銀七拾八匁四分五厘であったこともわかる。さらに続けて、元禄十五年（一七〇二）の見送り新調に伴い、その縁を猩々緋とするべく、巾六尺三寸、長さ二尺の赤羅紗裂を、銀三百三拾四匁で購入したことも記録されている。赤羅紗はこのように随分高価なものであったのである。もう一つの例として、鈴鹿山には正徳二年（一七二二）よりの再興奇進録が伝わり、その正徳三年（一七一三）の項に「猩々緋ほら幕拵申候」とあり、その値は記されていないが、この時の墨書銘のある猩々緋洞幕は今も大切に保管されている。こうした事例よりして赤羅紗の輸入の時期と祇園会での使用年とは一致しないと考えるべきであろう。北観音山文書には、享保二十年（一七三五）胴懸用の五色羅紗幕四面を白銀六枚で新調し（三井三郎助寄進）雨降用としたと記録があり、この五色羅紗幕は今も使用し得る状態で保管している。元文四年（一七三九）、占出山は猩々緋に波に鮎の刺繡を施し水引幕を新調しているが、この頃から宝暦年間にか

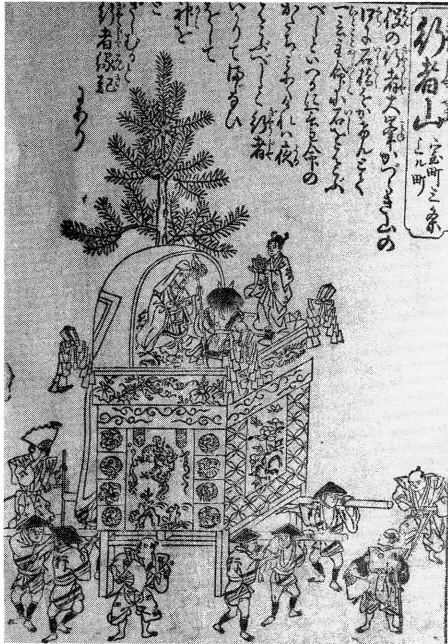
けて、羅紗の使用の普及を見たのであった。以上は山鉾町文書で確め得た羅紗使用の一端である。

唐蛮貨物帳には、宝永六年から正徳四年にかけて、長崎に荷上げされた、唐船、阿蘭陀船の積荷のすべてについて、品種、数量、長崎出しの価、が正確に記録されているから、これと山鉾町文書および現存品を合せて考察すれば、当時の山鉾風流に使われた染織品の実態を知る手がかりは少なくなろう。

加えて宝暦七年（一七五七）に刊行された『祇園御霊会細記』がある。この祇園会案内手引書は婦女子、児童にもわかるよう心がけた由を記しているほど細心を極めた良著であつて、当時の祇園会を知るのに役立つこと一通りではない。更に加えればこの本を増補したのが、文化十一年に筆写本で出された『増補祇園会細記』である。これは文政五年再版の『平安人物志』、天文曆等の項に名を連ねる役行者山町住人、藤田吉右衛門貞栄の労作であり、江戸後期、祇園会山鉾装飾が最も充実した時の実態の解説書である。（図12—A B）

おわりに

祇園会の懸装染織品については、先学による解説は多数あるけれども、山鉾町に遺存する町文書の精査、町有土蔵の隅々みまでの調査に基づく解説があれば、それはおのずから従来のものとは異なるであろう。私は昭和六十一年より平成四年にかけて、メトロポリタン



B 役行者山



図12 祇園御霊会細記 山鉾図解 A 鶏鉾

美術館の染織品保存部長、梶谷宣子氏、イスラム美術部長ダニエル・ウォーカー氏等と協同して継続調査に従事したが、その結果は「祇園祭山鉾懸装品調査報告書」（渡来染織品の部）として刊行できた。新たな一粒の解説である。ここにはそれとは別に、染織史の編年的興味からではなくて、祇園祭の山鉾町先住者達が、いつ、何を、どのような視点で山鉾のかざりに選び使用したかという、山鉾風流の内容に一步踏みこむつもりで、本稿を試みた。

（平成五年四月）

注

- (1) 高原美忠「八坂神社」九四頁
- (2) 松前 健「祇園社の祭神」『京の社』一二九頁
- (3) 祇園祭編集委員会編「略年譜」『祇園祭』巻末
- (4) 六角町文書「観音山道具預帳」付込
- (5) 川島元次郎「勘合符」『徳川初期の海外貿易家』一四頁
- (6) 姜 在彦「室町・江戸時代の善隣関係」『朝鮮通信使絵図集成』二二七頁

品種別渡来懸装染織品一覽

一、 中国綴錦

新調年

主要図様

懸装品所蔵名

製作期

元禄十二年(二六九九)	丸紋に花鳥図	見送	占出山	17C中
元禄十三年(二七〇〇)	百子嬉遊図	見送	黒主山	17C中
享保十三年(二七二八)	中国故事人物図	胴懸	鈴鹿山	18C初
寛保元年(二七四一)	金地百子嬉遊図	見送	北観音山	17C後
宝暦七年(二七五七)	龍文様官服直し	見送	太子山	17C前
〃	波濤龍宝尽し図	見送	山伏山	17C中
〃	百子嬉遊図	見送	放下鉾	17C前
〃	波濤龍官服直し	後懸	役行者山	18C前
〃	岩に牡丹と蝶図	前懸	役行者山	17C前
〃	綴錦とあつて図様不明	見送	菊水鉾	17C前
〃	百子嬉遊図	見送	油天神山	17C中
宝暦十四年(二七六四)	鳳凰に牡丹図	見送	黒主山	17C前
明和七年(二七七〇)	婦女嬉遊図	見送	役行者山	17C前
安永七年(二七七八)	龍文様椅子覆	前懸	船鉾	17C前
天明五年(二七八五)	牡丹唐草図	水引	北観音山	17C初
天明五年(二七八五)	龍文様椅子覆	前懸	役行者山	17C中
天明五年(二七八五)	婦女嬉遊図	見送	八幡山	18C
天明五年(二七八五)	婦女嬉遊図	前懸	郭巨山	17C中
文化四年(二八〇七)	百子嬉遊図	見送	北観音山	18C中
文化十三年(二八一六)	波濤龍官服直し	見送	鈴鹿山	16C中
文化十四年(二八一七)	波濤龍官服直し	前懸	黒主山	16C中

点を数える。

二、 欧州のタピストリー(毛綴錦)

文政七年(二八二四)	雲龍波濤図	見送	南観音山	18C前
文政十年(二八二七)	波濤龍官服直し	前懸	橋弁慶山	18C前
天保十二年(二八四一)	波濤龍官服直し	見送	菊水鉾	18C
元治二年(二八六五)	百子嬉遊図	見送	白楽天山	17C中
昭和六十一年(一九八六)	百子嬉遊図	見送	北観音山	17C中
(注)宝暦七年以降は新調年の確実なものだけを記した。不明のものは六点を数える。				
旧約聖書、イサクに水を供するリベカ・タピストリー	「イーリヤスト」ト	見送	鯉山	16C後
「イーリヤスト」ト	ロイヤ戦争物語	前懸	函谷鉾	16C中
アポロン像を礼拝するプリモアストカペー	「イーリヤスト」ト	見送	鶏鉾	16C後
「イーリヤスト」ト	ロイヤ戦争物語	前懸	霞天神山	16C後
出陣するヘクトールの妻子との別れ	「イーリヤスト」ト	見送	白楽天山	16C後
「イーリヤスト」ト	ロイヤ戦争物語	前懸		
額	ロイヤ戦争物語	前懸		
「イーリヤスト」ト	ロイヤ戦争物語	前懸		
陥落したトロイアから脱出するアイネイアース部分	「イーリヤスト」ト	前懸		



図14 旧訳聖書イサクに水を供するリベカタピスリー、前懸、函谷鉾



図13 百子嬉遊図綴錦、見送、黒主山



図16 エジプト風景欧州織絨毯、胴懸、浄妙山

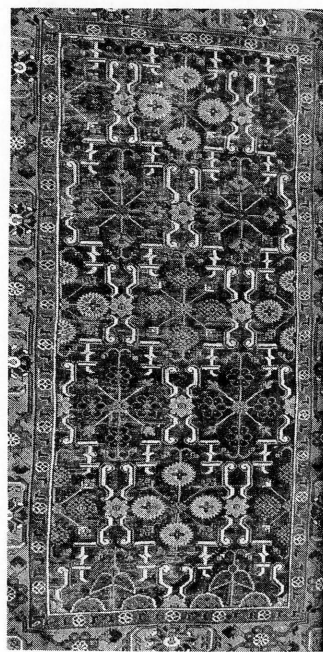


図15 変斜格子花文様インド絨毯、胴懸、岩戸山

三、絨毯

慶安三年 (一六五〇)	中東連花葉文様 ラホール絨毯	前懸	函谷鉾	17 C 前	〃	〃	〃	メダリオン中東連 花葉文様	後懸	鶏鉾	17 C 後
貞享三年 (一六八六) 以前	中東連花葉文様 ポロネーズ絨毯	前懸	長刀鉾	17 C 中	〃	〃	〃	中東連花葉文葉 ヘラット絨毯	前懸	鶏鉾	〃
〃	中東連花葉文様 ラホール絨毯	後懸	長刀鉾	17 C 中	〃	〃	〃	メダリオン中東連 花葉文様	前懸	月鉾	17 C 前
延享元年 (一七四四) 以前	中東連花瑞雲文様 インドベルシヤ絨 毯	前懸	放下鉾	17 C 後	〃	〃	〃	唐花縁狸々緋 唐花一枚その他な し	前懸	菊水鉾	〃
〃	インド模織絨毯	後懸	放下鉾	17 C 後	〃	〃	〃	中東瑞鳥連花葉文 様	胴懸	菊水鉾	〃
〃	中東連花鋸葉文様 インド絨毯	後懸	放下鉾	17 C 後	〃	〃	〃	ヘラット絨毯	胴懸	鶏鉾	17 C 前
元文五年 (一七四〇)	変斜格子花文様 インド絨毯	胴懸	岩戸山	18 C 初 ¹⁵⁾	〃	〃	〃	花氈阿蘭陀物 びろうどのごとし	前懸	鷹山	〃
元文五年 (一七四〇)	変斜格子花文様 インド絨毯	胴懸	岩戸山	18 C 初	〃	〃	〃	中東連花葉文様 インド絨毯	胴懸	月鉾	18 C 前
元文五年 (一七四〇)	中東連花葉文様 インド絨毯	後懸	岩戸山	18 C 前	〃	〃	〃	幾何菱文様 アナトリア絨毯	胴懸	月鉾	18 C 前
寛延二年 (一七四九)	中東連花葉文様 インドベルシヤ絨 毯	胴懸	放下鉾	17 C 前	〃	〃	〃	中東連花葉文様 インド絨毯	胴懸	放下鉾	18 C 中
宝暦二年 (一七五二)	中東連花葉文様 インド絨毯	胴懸	北観音山	18 C 前	宝暦十三年 (一七六三)	〃	〃	八ツ星メダリオン インド絨毯	後懸	函谷鉾	17 C 後
宝暦二年 (一七五二)	斜格子草花文様 インド絨毯	胴懸	北観音山	18 C 前	安永二年 (一七七三)	〃	〃	中東連花葉文様 インド絨毯	胴懸	函谷鉾	18 C 前
宝暦四年 (一七五四)	メダリオン、中東 連花葉文様	前懸	放下鉾	17 C 後	安永二年 (一七七三)	〃	〃	八ツ星メダリオン インド絨毯	後懸	北観音山	17 C 末
宝暦七年 (一七五七) 以前	マムルク朝曼茶羅 文様 インド模織絨毯	前懸	北観音山	17 C 後	寛政三年 (一七九一)	〃	〃	中東連花葉文様 インド絨毯	前懸	北観音山	17 C 末

寛政五年 (二七九三) 以前

大斜格子草花文様
インド絨毯
胴懸 鶏 鉾 18C 後

文化十一年(二八一四)以前

大斜格子草花文様
インド絨毯
胴懸 鶏 鉾 18C 後

文化十一年(二八一四)以前

中東連花葉文様
インド絨毯
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

中東連花葉文様

中東連花葉文様
胴懸 南観音山 18C 前

四、 欧州の織絨毯

天保三年 (二八三二)

エジプト風景図
胴懸 淨妙山 (圖16) 19C 初

天保三年 (二八三二)

エジプト風景図
胴懸 淨妙山 19C 初

天保三年 (二八三二)

室内洋犬図
前懸 淨妙山 19C 初

天保三年 (二八三二)

狩猟風景図
後懸 淨妙山 19C 初

天保三年 (二八三二)

バラ文様
水引 北観音山 19C 中

天保三年 (二八三二)

メダリオン格子
水引 北観音山 19C 中

天保三年 (二八三二)

花輪散し文様
水引 北観音山 19C 中

天保三年 (二八三二)

中東幾何文様
水引 木賊山 19C 後

六、 緞子

宝曆七年 (二七五七) 以前

唐渡り茶緞子
見送 伯牙山

唐緞子

唐緞子
幔幕 保昌山

緞子

緞子
緋純子花色緞子
胴幕 船 鉾

緞子

緞子
緞子
水引 役行者山

緞子

緞子
緞子
水引 岩戸山 (圖18) 18C 初

緞子

緞子
緞子
水引 岩戸山 (圖18) 18C 初

緞子

緞子
緞子
水引 岩戸山 (圖18) 18C 初

緞子

緞子
緞子
水引 岩戸山 (圖18) 18C 初

緞子

緞子
緞子
水引 岩戸山 (圖18) 18C 初

五、 中国錦織

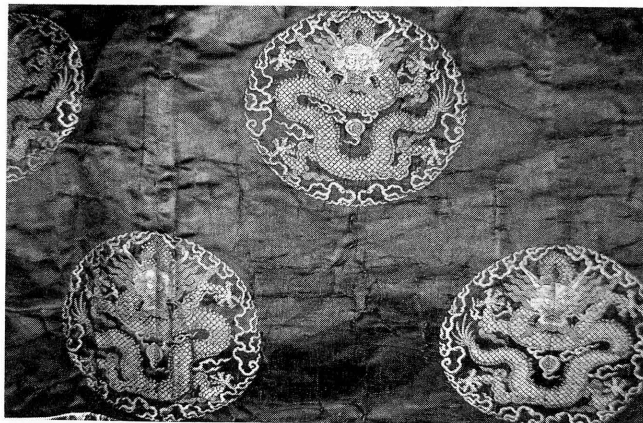


図18 紺地丸龍朝鮮錦、水引、岩戸山

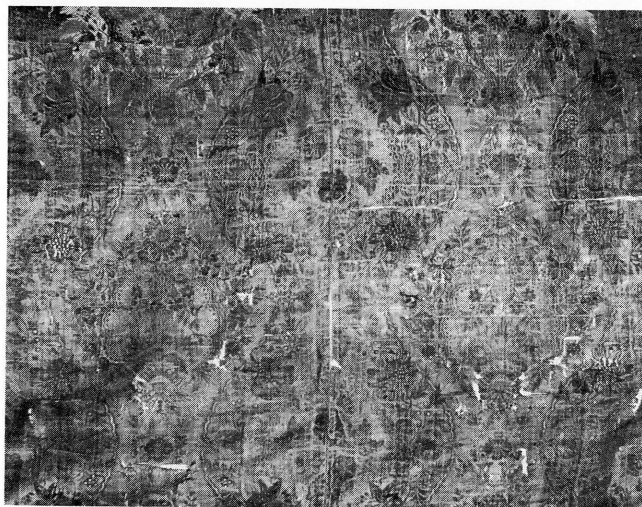


図19 花飾立湧文様欧州錦、胴懸、芦刈山



図20 紺地波涛龍蝦夷錦、前懸、油天神山

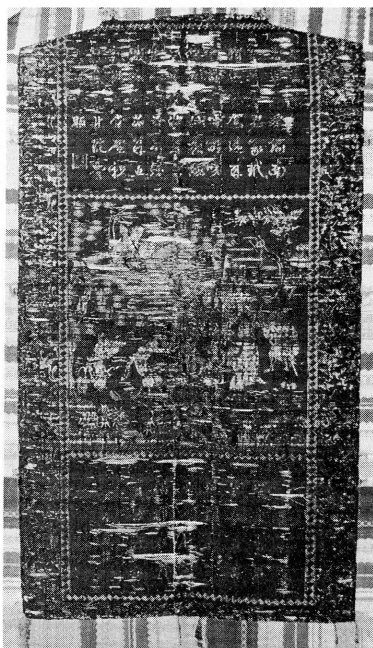


図17 慶寿詩八仙人図錦織、見送、八幡山

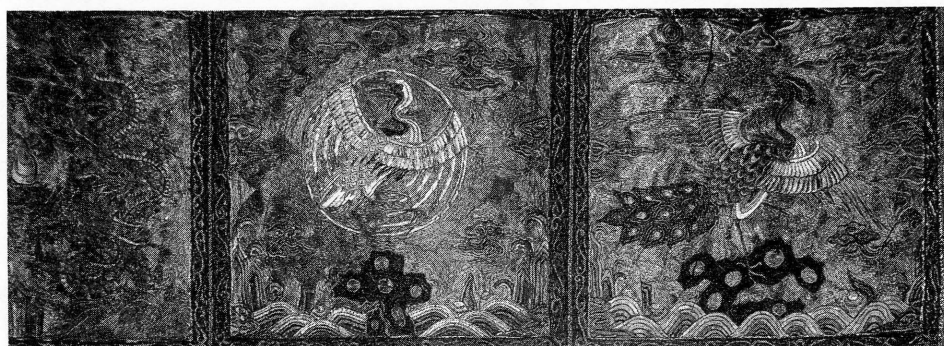


図21 波濤に鳥胸背、水引部分、保昌山

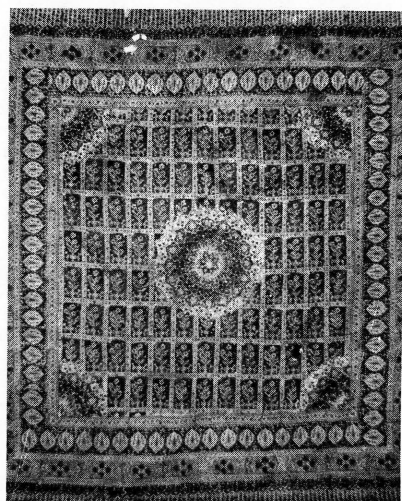


図24 円紋に花疊印度更紗、見送、南観音山

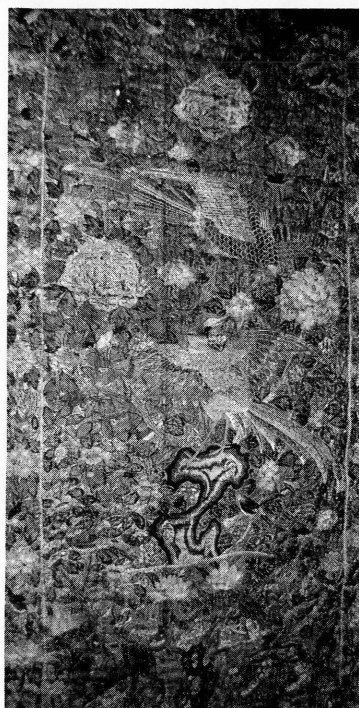


図22 鳳凰牡丹図中国刺繍、見送、孟宗山



図23 孔雀に幻想花樹印度刺繍、胴懸、太子山

天保九年 (一八三八)

鳥獸牡丹唐草

水引 函谷鉾

17 C

十三、 印度刺繡

安永四年 (二七七五)

孔雀に幻想花樹

胴懸 太子山

18 C²³ 中

十四、 印度更紗

貞享元年 (二六八四)

円紋に花畳と家並に花の二枚継ぎ
花尽し文様二種
円紋に花尽文様
紋章に唐草繫

見送 南観音山 17 C²⁴ 中
衣裳 船 鉾 17 C 後
後懸 八幡山 18 C 後
後懸 鈴鹿山 18 C 中
胴懸 鯉山 19 C 中
前懸 南観音山 18 C 前
左懸 南観音山 18 C 後
衣裳 芦刈山 19 C 初
幕 南観音山 19 C 中
後掛 白楽天山 19 C 中

文化元年 (二八〇四)

円紋花入斜格子

後懸 鯉山

19 C 中

文化五年 (二八〇八)

障屏山水花鳥図

前懸 南観音山

18 C 前

文政七年 (二八二四)

花立涌文様

左懸 南観音山

18 C 後

文政七年 (二八二七)

花樹繫文様

衣裳 芦刈山

19 C 初

明治十九年 (二八八六)

縞に小花文様

幕 南観音山

19 C 中

十五、 欧州捺染

文政六年 (二八二三)

△群小花唐草文様

胴懸 長刀鉾

19 C 初

文政六年 (二八二三)

△群小花唐草文様

舞台 黒主山

19 C 初

文政七年 (二八二四)

擬似中国風景

胴懸 南観音山

18 C 後

文政七年 (二八二四)

経縞花文様

胴懸 南観音山

18 C 後

天保二年 (二八三一)

子持縞花文様

裾幕 占出山

18 C 後

天保二年 (二八三一)

小花文様

胴懸 占出山

19 C 初

弘化四年 (二八四七)

赤地蔓花文様

胴幕 放下鉾

19 C 前

弘化四年 (二八四七)

赤地小花文様

胴幕 放下鉾

19 C 前

安政二年 (二八五五)

花入小円文様

水引 放下鉾

19 C 前

元治元年 (二八六四)

よろけ立涌花文様

見送 白楽天山

19 C 中

慶応元年 (二八六五)

△蔓小花唐草文様

胴懸 孟宗山

19 C 中

円紋擬似ペイズリ

見送 保昌山

裏地 保昌山

19 C 前

白地小花文様

後懸 保昌山

後懸 保昌山

19 C 前

赤地小花文様

胴懸 保昌山

胴懸 保昌山

19 C 前

花束文様

水引 保昌山

裏地 保昌山

19 C 前

茶地斜格子花文様

水引 鶏 鉾

裏地 鶏 鉾

18 C 後

赤地花文様

水引 月 鉾

水引 月 鉾

19 C²⁵ 前

花束散文様

天井幕 月 鉾

後懸 山伏山

19 C 前

花瓶花散文様

上部 山伏山

後懸 山伏山

19 C 前

(注) △印は毛織物に捺染

蓬萊山に花瓶図

胴懸 函谷鉾

胴懸 函谷鉾

19 C²⁶ 初

蓬萊山に蝶図

胴懸 函谷鉾

胴懸 函谷鉾

19 C 初

窓絵風景に鳥図

胴懸 月 鉾

右のもの計四枚

19 C 初

黒天鷲絨

幔幕 鈴鹿山

幔幕 鈴鹿山

19 C 初

享保十三年 (二七二八)

天鷲絨

幔幕 鈴鹿山

19 C 初

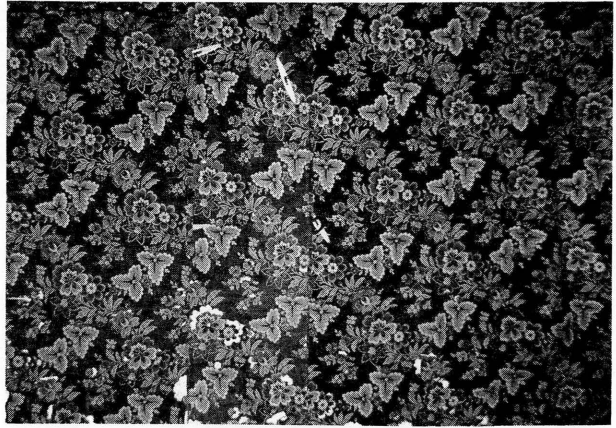


図25 赤地花文様欧州捺染、水引、月鉾

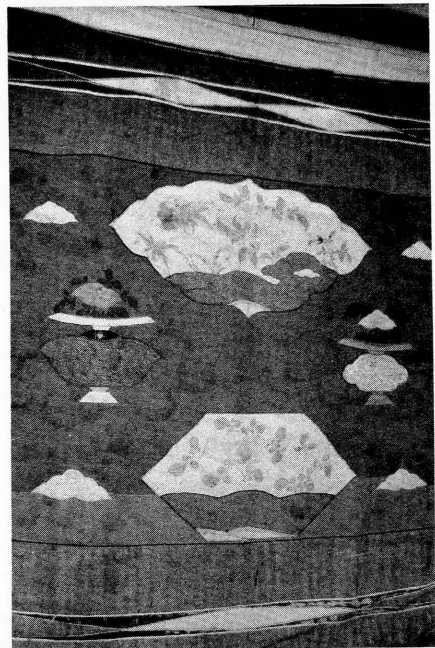


図26 蓮来山に花瓶朝鮮綴、桐懸、函谷鉾

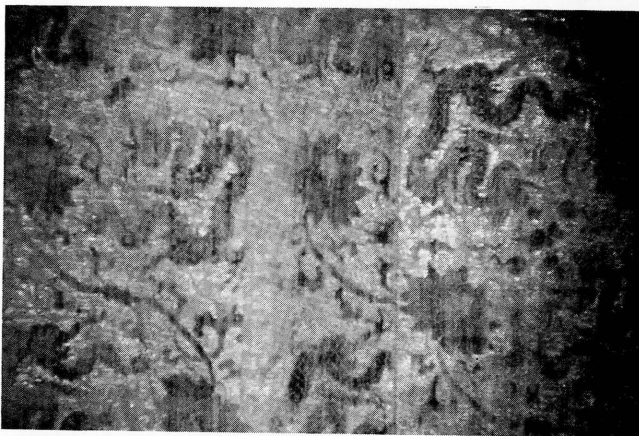


図27 金入龍牡丹文様天鳶絨、見送裏、鯉山

寛保元年 (一七四一)	黒天鷲絨	見送 上部	北観音山
寛政五年 (一七九三)	金入龍牡丹文様	見送 裏地	鯉山 ^(圖27) 18C後
寛政五年 (一七九三)	黒天鷲絨	後懸 生地	郭巨山 18C後

この他宝暦七年以降十五件の使用例がある。

参考文献目録

一、古文獻

- 1 祇園御霊会細記 めと木屋勘兵衛刊 宝暦七年 京都府総合資料館蔵本
 - 山鉾図解、山鉾由来記 上・下巻
 - 2 筆写本祇園会山鉾飾付留 雑色 五十嵐源吾 寛政五年 萩野家蔵本
 - 3 筆写本増補祇園会細記 藤田吉右衛門貞栄 文化九〜十一年 役行者山町蔵本
 - 4 筆写本祇園会山鉾装鈔 服部敏夏 文政元年〜文政十年 京都府立総合資料館蔵本
 - 5 京都博物館編「八坂私祭会鉾車山車所属品目録及由緒書」明治九年 国立京都博物館蔵本
- 二、単行本など
- 1 川島元次郎「徳川初期の海外貿易家」 仁友社 大正六年
 - 2 武田恒夫解説「洛中洛外図 特別目録No.20」 京都国立博物館 昭和四〇年
 - 3 北村哲郎他重要良俗資料「祇園祭山鉾由緒書及びその付属品目録」第一集〜第三集 京都市文化観光局文化財保護課 昭和四四年〜四七年
 - 4 富田康夫他 祇園会山鉾「鷹山」関係史料上下—京三条衣棚町文書— 同志社大学人文科学研究所 昭和四四年〜四六年
 - 5 祇園祭染織研究会編「祇園祭染織名品集」上下 芸艸堂 昭和四五年
 - 大田英蔵「山鉾懸装の変遷」
 - 北村哲郎「更紗」
 - 6 龍村平蔵「毛綴錦」山鉾巡行懸装に於る奇蹟 永積洋子訳「平戸オランダ商館の日記」 岩波書店 昭和四四年〜四五年
 - 7 山脇梯二郎解題「唐蛮貨物帳」 内閣文庫 昭和四五年
 - 8 高原美忠「八坂神社」 芸能史研究会編「日本庶民文化史料集成」巻三 学生社 昭和四七年
 - 9 植木行宣解題「祇園会細記」 三一書房 昭和四九年
 - 10 祇園祭編集委員会編「祇園祭」 筑摩書房 昭和五一年
 - 林屋辰三郎、川島将生「祇園祭の歴史」
 - 切畑 健「山鉾の懸装」
 - 11 福井秀一編「白染天山」 財団法人白染天山保存会 昭和五一年
 - 12 松田元「祇園祭細見」 郷土行事の会 昭和五二年
 - 13 野口安左衛門編「鯉山」 財団法人鯉山保存会 昭和五五年
 - 14 田代和生「近世日朝通交貿易史の研究」 創文社 昭和五六年
 - 15 若原史明「山鉾大鑑」 八坂神社 昭和五七年
 - 16 岡見正雄「標注洛中洛外屏風上杉本」 岩波書店 昭和五八年
 - 17 「洛中洛外図の世界」 京都府立総合資料館 昭和五八年
 - 18 上田正昭他「京の社」神々と祭り 人文書院 昭和六〇年
 - 19 松前 健「祇園天王信仰の源流」 中公新書 昭和六〇年
 - 脇田晴子「室町時代」

20 辛 基秀他「朝鮮通信使絵図集成」 講談社 昭和六〇年

小林 忠「朝鮮通信使の記録画と風俗画」

姜 在彦「室町・江戸時代の善隣関係」

21 出光美術館編「館藏品名品集」 出光美術館 昭和六一年

22 小松茂美編「年中行事絵巻」日本の絵巻8 中央公論社 昭和六二年

23 石田尚豊他「洛中洛外図大観」 小学館 昭和六二年

24 高橋康夫「洛中洛外図の概観」——町田家旧蔵本を中心として 平凡社 昭和六三年

25 「講座祇園囃子」 祇園祭山鉾連合会 昭和六三年

山路興造「祇園囃子の源流と変遷」

26 サントリー美術館事務局「サントリー美術館名品集」 サントリー美術館 平成三年

27 奥平俊六 名宝日本の美術 巻25「洛中洛外図と南蛮屏風」 小学館 平成三年

28 祇園祭山鉾連合会編「山町鉾町特別記念号」 祇園祭山鉾連合会 平成三年

武田恒夫「祇園祭礼図さまざま」

29 小林忠他 秘蔵日本美術大観 第八巻「ケルン東洋美術館」 講談社 平成四年

30 梶谷宣子 吉田孝次郎「祇園祭山鉾懸装品調査報告書」 祇園祭山鉾連合会 平成四年

31 渡来染織品の部

東京国立博物館編「日本出土の舶載陶磁」東京国立博物館 平成五年

朝鮮、ベトナム、タイ、イスラム

祇園会に関する参考絵画資料一覧

年中行事絵巻 模本巻九、十二 田中家蔵

月次祭礼図 模本第五扇第六扇 東京国立博物館蔵

京洛月次風俗図扇流屏風 光円寺蔵

祇園、山王祭礼図屏風 サントリー美術館蔵

町田家本 洛中洛外図屏風 国立歴史民俗博物館蔵

上杉家本 洛中洛外図屏風 山形県米沢教育委員会蔵

勝興寺本 洛中洛外図屏風 富山県勝興寺蔵

江戸図屏風 国立歴史民俗博物館蔵

八幡山本 祇園祭礼図 財団法人八幡山保存会蔵

祇園御霊会細記 山鉾図解 京都府立総合資料館蔵

懸装品に関する山鉾町伝来の現存古文書目録

芦刈山町 祇園会 安政五年〜明治二二年

岩戸山町 祇園会式目干并目録 享保四年〜安永七年

占出山町 祇園会占出山神具入日記 宝暦二一年〜文化三年

祇園会占出山神具入日記 文政四年〜天保二年

役行者山町 買渡し証文 安永五年

郭巨山町 寛 明和七年

寄進帳 寛政元年〜文政九年

郭巨山寄進但し諸記録 文政二年〜慶応三年

御鉾再建寄付録 天保九年

函谷鉾町 函谷鉾誌 昭和二年

北観音山町 観音山寄進帳 享保九年〜文化一四年

御山再建金銭出入帳 文政二一年〜安政六年

浄妙山町

常明山造管控帳 寛政九年

口上書 文化一三年

口上書 文政元年

口上書 天保三年

浄妙山沿革誌 大正一二年

鈴鹿山町

正徳式年辰六月鈴鹿山寄進帳 正徳二年〜安永三年

鈴鹿山永代神事式 明和六年〜明治四年

太子山町

太子山祇園会入払帳 寛延二年〜文久二年

長刀鉾町

長刀鉾道具拵覚帳 貞享三年〜文久三年

鶏鉾町

定法度 文禄五年〜寛永一五年

鶏鉾之記并飾付之写 文政四年

鉾飾物道具改正日記 文政五年

鶏鉾飾付写 天保三年

伯牙山町

祇園会山鋸箱入并諸道具扣帳 文政二年〜明治四年

白楽天山町

白楽天山之鬮帳祇園会白楽天山鬮取進退之覚 慶長七年〜明治一四年

山鋸道具帳 宝永五年〜明和九年

御山寄進控新出来物控 明和元年〜安政四年

御山御寄進控新出来物控並に諸品物預控 一〜六 安政五年

〜昭和三年

橋弁慶山町

覚 文化五年

覚 文化六年

売上一札事 文化六年

売上一札事 文政一〇年

橋弁慶山諸道具目録控 天保三年

橋弁慶山神事道具預控帳 嘉永六年

八幡山町

八幡山飾物入日記 天保一〇年〜安政五年

船鉾町

八幡山記録(京都市観光課) 昭和三一〜続行中
船鉾飾道具入日記 正保二年〜

南北袋屋町祇園会寄進帳 延享三年〜明治六年

放下鉾町

1 祇園会十人行事兒元之覚并寄進物之覚 延享元年〜天明七年

2 祇園会兒元并寄進物之覚 天明八年〜文化一二年

3 祇園会兒元并寄進物之覚 文化一三年〜文政一〇

4 祇園会兒元并寄進物之覚 文政一一年〜嘉永二年

5 祇園会兒元并寄進物之覚 嘉永三年〜明治二三年

6 祇園会兒元并寄進物之覚 明治二四年〜昭和七年

鉾其外道具入日記 天保七年 六月改

鉾其外道具入日記 安政四年 八月改

孟宗山一式 慶応元年〜明治八年

孟宗山町

孟宗山一式 慶応元年〜明治八年

この研究論文は、国際日本文化研究センターの共同研究「江戸時代の芸術における外国文化(中国を中心として)の受容と変容」の成果のひとつです。